

巻頭言

海外帰国子女教育と私

中井 明 (元中学校教員、元松下電器社員)

昭和46年、大阪市立中学校の私の学級にニューヨーク日本語補習授業校から転入し、当時としては珍しかった帰国子女との出会いが私と海外帰国子女教育の始まりです。彼女の英語力も日本語力も素晴らしく、当時は反ベトナム戦争の一つとしてフォークソングが全盛で、幾つかの歌詞の英語版と日本語版を作ってもらい全校集会で合唱した時もありました。このようなバイリンガルな生徒を育てている外国の学校とはどんな学校なのか、とても関心と興味がありました。そして海外日本人学校の存在を知り、いつか勤めてみたいと思っていました。その当時の海外日本人学校は、教育大の付属の小・中がお世話していたので公立学校の教員は応募する事は難しかったです。

昭和49年の2学期に、校長先生から「書類が来ている」と見せて頂いたのが海外日本人学校派遣教員の募集要項でした。早速、推薦して頂き選考を受けました。多分この時が派遣教員の公開公募の第一回目ではなかったかと思えます。大阪市から大阪府、文部省へと選考が進み最後の面接で「暑い所ですよ」とシンガポール日本人学校が内定しました。三学期の授業を終えて東京の青山会館で一泊の研修を受けて、初めて中学部充実のために17名の教員が同時に派遣され私が中学部部長である事を知り心が引き締まりました。シンガポール日本人学校勤務中は現場にいたので現地理解教育などに取り組みました。シンガポール日本人学校を訪れた小林、小島先生達の共同研究にお手伝いもいたしました。この当時から海外子女教育の組織的な研究が始まったようです。

昭和53年、勤務を終えて日本に帰国し全海研や異文化間教育学会などに参加して深く海外帰国子女教育や国際理解教育に関わる事になりました。帰国後の三年目に再び派遣教員に推薦されましたが、シンガポール日本人学校の時に家族ぐるみのお付き合いのあった父兄のご紹介で「海外生活と海外帰国子女教育にご経験のある先生も松下電器の国際化に力を貸して頂けませんか、ブラジルで日本人学校を作って頂けませんか」という呼びかけで、昭和57年に入社して社員研修を受けてブラジル松下電器に赴任し、世界でもあまり例のない企業立サンジョゼ日本人学校を作りました。ブラジルでの六年間は会社、父兄、児童生徒の協力と支援で、日本人学校の原形とも言うべき暖かい家族的な雰囲気にも包まれた小さな小さな日本人学校が育ちました。

昭和63年、会社も現地スタッフも順調に育ち海外勤務者も減少し休校になり、日本に帰国して松下電器の海外人事センターに勤めました。そこでは多くの海外勤務者とご家族の方々の出国、滞在、帰国のお世話係をいたしました。今回は一国一枚の海外帰国子女教育だけでなく全世界の海外帰国子女教育を勉強する機会に恵まれました。その間、帰国子女を考える会のメンバーと共にマレーシア、中国、オーストラリアの日本人社会と海外子女教育の現場を見る事が出来とても有意義でした。この20数年間は、派遣教員・帰国教員、派遣社員・帰国社員として貴重な体験をしました。またたくさんの方々と共に充実した海外帰国子女教育を歩む事が出来ました。心より厚くお礼を申し上げます。